

## 免疫アレルギー疾患予防・治療研究に係る企画及び評価の今後の方向性の策定に関する研究

研究代表者 秋山一男(独立行政法人国立病院機構相模原病院 院長)

### 研究要旨

本研究課題は、我が国における免疫アレルギー疾患および移植医療分野の診断・治療・管理法の向上を最終目標とし、移植医療分野を含む免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業における長期的・中期的さらには危急的目標に対しての適切な研究課題の企画・評価を実施するための方向性を探り、厚生労働科学研究の質の向上・維持を図ることを目的とするとともに、アレルギー疾患の自己管理の指針となるべきマニュアルの作成・改訂とその効果の検証及び患者自身における自己管理能力の開発とその評価・検証システムの構築を目的として実施された。**1.免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業事務局機能の実施**:については、各研究班が活発な研究を実施し、規定年度内に十分な成果を上げて報告会及び各種一流専門誌に成果を発表したが、事務局として個別の対応をしつつ効率的な事業ができたと思われる。ただ、年度末の評価報告会への主任研究者以外の分担研究者、研究協力者の出席が少なかつたこと、評価委員の出席も必ずしも十分でなく、本報告会の今後の開催方法について再検討が必要である。抄録集、報告書、カラーパンフレットの作成刊行は予定通りにできた。**2.免疫アレルギー疾患関連情報発信機能の実施**:アレルギー情報センターとして医療関係者、研究者、一般国民向けと当初からの目的である全方位性の時宜にかなった情報発信はできたと思われる。ただ、ガイドラインについては、リウマチ関連のガイドラインの掲載が遅れていることは、今後早急に改善する必要がある。**3.アレルギー疾患自己管理マニュアルの作成及び患者主導の慢性疾患セルフマネジメントプログラム(Chronic Disease Self-Management Program; 以下 CDSMP)の効果の検証**:自己管理マニュアルは、患者さん向け講演会等での配布希望が多く、可能な限り対応してきたことは、自己管理すべき疾患としてのアレルギー疾患治療、管理の向上に有用であった。また、モンゴル語版の翻訳作成に着手できたことも我が国のガイドラインが国際的に認識されるきっかけとなることが期待される。また、CDSMP の効果検証および効果発現のメカニズム解明に関しては計画通り実行し達成できたと考ええる。

本研究班の業務としては、免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業を円滑に効果的に実施し、その成果をもって、我が国の免疫アレルギー医療の向上につなげることであり、社会的意義は十分に達成できている。また、各研究班の研究成果も一流の国際誌にすでに掲載されたもの、受理されたもの、現在投稿中のものなど、いずれも十分な学術的、国際的意義とレベルを保った研究である。CDSMP に関しても、多くの国で展開され、効果を見せているプログラムについて、効果発現のメカニズムを具体的に示せたことは、今後、日本における患者教育に何が必要かを検討する上で参考となり、社会的意義あるものと考ええる。平成 9 年度から発足した本研究事業もすでに 16 年が経過し、この間の研究成果として多くの診療ガイドラインの刊行、リウマチ・アレルギー疾患の疫学統計の充実、さらにそこから明らかになった問題点に対しての基礎的、臨床的研究の実施による各種新規治療法、管理法の開発へとつながってきた。今後は、現在進行中の各種研究をさらに発展させて我が国のリウマチ・アレルギー疾患医療の発展につながることが大いに期待される。研究内容の効率性については、課題設定時に重複課題を避けることと、研究内容の共通部分については、関連研究班での連携を進めることでより効率的な研究ができると思われた。

#### 研究分担者

松井利浩、長谷川眞紀（国立病院機構相模原病院臨床研究センター）

穴戸 清一郎（東邦大学医学部小児腎臓学講座）

安酸 史子（防衛医科大学校医学教育部）

#### 研究協力者

安枝 浩（国立病院機構相模原病院臨床研究センター）

栗山 真理子、松寄 くみ子、米田 富士子（特定非営利活動法人アレルギー児を支える全国ネット：アラジーポット）

北川 明、山住 康恵（防衛医科大学校医学教育部）

小野 美穂（川崎医療福祉大学医療福祉学部）

江上 千代美、田中 美智子、生駒 千恵、松井 聡子、清水 夏子、石田智恵美（福岡県立大学看護学部）

松浦 江美（活水女子大学看護学部）

長坂 猛（宮崎県立看護大学看護学部）

山崎 喜比古（日本福祉大学社会福祉学部）

米倉 佑貴（東京大学社会科学研究所）

湯川 慶子、朴 敏廷、上野 治香（東京大学大学院医学系研究科）

香川 由美（社団法人 日本看護協会）

#### A. 研究目的

現在我が国全人口の30%超が罹患しているといわれるアレルギー疾患及びQOL阻害の最も著しいといわれているリウマチ性疾患を克服するための研究及び臓器移植提供要件緩和に伴う臓器移植症例の増加に伴う移植医療分野の研究は、厚生労働省における行政的視点からも危急の課題である。我が国における当該分野において諸外国に比肩しうる研究を実施するためには、長期的、中期的目標の設定は勿論のこと、緊急の課題の解決をも視野に入れた適切な研究課題の設定、最適な研究者の選考、さらに厳密な研究成果の評価が必要不可欠である。また、厚生科学審議会疾病対策部会から発出されたリウマチ・アレルギー検討会報告書では、アレルギー疾患においては、自己管理が重要であることが強調され、厚生労働省として自己管理を可能とするために国と都道府県との役割分担を明確に示した。

そのような我が国のアレルギー・免疫医療行政の中で、本研究課題は、我が国における免疫アレルギー疾患及び移植医療分野の診断・治療・管理法の向上を図り、免疫アレルギー疾患及び臓器移植患者のQOLの向上をめざした研究を支えるとともに、免疫アレルギー疾患の自己管理に必要な資料及び支援プログラムを開発、提供することである。本研究課題では、主に3点について実施した。

**1) 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業事務局機能の実施：**科学的かつ行政的視点から適切かつ実施可能性、成果の医療現場への還元可能性等を考慮した研究課題を各専門分野の分担研究者を中心に情報収集を行ない、適切な課題設定のための情報を提供する。事務局業務として所管課と研究担当者との間の連絡調整機能を果たし、年度末の評価研究報告会開催、報告会用抄録及び研究報告書の刊行、研究終了課題についての一般国民向けカラーパンフレットの作成等を行う。1昨年度からは、臓器移植部門においても評価報告会を開催したが、今年度も同様リウマチ・アレルギー部門と臓器移植部門は別々に開催する予定である。

**2) 免疫アレルギー疾患関連情報発信機能の実施：**本研究事業で得られた科学的研究の結果及び本研究事業で策定された各種疾患治療・予防のガイドライン等について、広く一般医療従事者、患者への啓発普及を図るためにリウマチ・アレルギー情報センター（<http://www.allergy.go.jp>）による本研究事業における各研究班の年次総括報告書並びにガイドラインの最新改訂版の情報提供を図る。その中で、期間限定でスギ花粉症に対しての医療従事者向けの相談対応窓口を例年のように開設し、時宜にかなった情報発信及び対応を行なう。

**3) アレルギー疾患自己管理マニュアルの作成及び患者主導の慢CDSMPの効果の検証：**(1) アレルギー疾患自己管理マニュアルの改訂及び普及状況の調査、効果の検証及び効果的使用法の検討：これまでに作成刊行してきた各種疾患の自己管理マニュアル「セルフケアナビ」について、当該疾患ガイドラインの改訂に対応する改訂版の作成及びその普及に努め

るとともに、これら作成した自己管理マニュアルの普及状況の調査と効果的な使用法を検討し、患者からの意見を参考に必要に応じての改訂を図る。また、食物アレルギーに関しては、昨年度から継続しているモンゴル語翻訳版に加えて、英語版の作成も予定している。(2) CDSMP の効果の検討(安酸分担研究者担当): 研究 : CDSMP 全受講者を対象とした質問紙による受講効果の追跡調査研究。研究 : CDSMP を受講した関節リウマチ(RA)患者を対象とした生理学的変化の追跡調査研究。研究 : CDSMP を受講し加えてワークショップ進行の認定資格を取得している慢性疾患患者を対象とした効果発現メカニズムに関するインタビュー調査研究

## B. 研究方法

### 1) 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業事務局機能の実施

平成9年度から発足した「免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業」において科学的かつ行政的視点から適切かつ実施可能性、成果の医療現場への還元可能性等を考慮した研究課題を各専門分野の分担研究者を中心に情報収集を行ない、適切な課題設定のための情報を提供する。事務局業務として所管課と研究担当者との連絡調整機能を果たし、年度末の評価研究報告会開催、報告会用抄録及び研究報告書の刊行、研究終了課題についての一般国民向けカラーパンフレットの作成等を行う。

### 2) 免疫アレルギー疾患関連情報発信機能の実施

本研究事業で得られた科学的研究の結果及び本研究事業で策定された各種疾患治療・予防のガイドライン等について、広く一般医療従事者、患者への啓発普及を図るためにリウマチ・アレルギー情報センター(<http://www.allergy.go.jp>)による改訂版の情報提供を図る。また、期間限定でスギ花粉症に対する医療従事者向けの相談対応窓口を開設する。また「茶のしずく石鹸」によるアレルギー被害関連の情報サイトについては、日本アレルギー学会HPでの開設まで継続運営するなど、時宜にかなった情報発信及び対応を行なう。また、厚生労働省免疫アレルギー疾患予防・治療研究推進事業として財団法人日本予防

医学協会が主催するリウマチ・アレルギーシンポジウムの開催に関してプログラム作成、講師選定等につき関与する。

### 3) アレルギー疾患自己管理マニュアルの作成及び患者主導の CDSMP の効果の検証

(1) アレルギー疾患自己管理マニュアルの普及状況の調査と効果の検証及び効果的使用法の検討: これまで当班では、リウマチ・アレルギー対策委員会報告書における今後のアレルギー診療の根幹をなす「アレルギー疾患を自己管理可能な疾患に」を実現するために小児から成人、高齢者まで全年齢層を包含しうる自己管理マニュアルの作成を行ない、その普及に努めてきた。今期は、昨年度改訂された各種セルフケアナビの普及に努め、これら作成した自己管理マニュアルの普及状況の調査と効果的な使用法を検討し、患者からの意見を参考に必要に応じての改訂を図る。また、食物アレルギーに関しては、昨年度から継続しているモンゴル語翻訳版に加えて、英語版の作成も予定している。

(2) CDSMP の効果の検討: CDSMP 全受講者を対象とした質問紙による受講効果の追跡調査研究: 2011年4月から2012年12月までにCDSMP受講を開始した者すべてに質問紙への回答を依頼した。回答が得られた者を追跡対象とし3ヶ月後、6ヶ月後、1年後に追跡調査を行い、追跡調査への回答が得られた193名を分析対象とした。効果指標は生活の質(QOL)、ストレス対処能力、健康問題に対処する自己効力感、セルフマネジメント行動として症状への認知的対処法実行度、ストレッチ・筋力トレーニング実行時間、有酸素運動実行時間、医師とのコミュニケーション、服薬アドヒアランス、健康状態の自己評価、健康状態についての悩み、不安、抑うつを用いた。分析方法はそれぞれの効果指標を従属変数、年齢、性別、配偶者の有無、同居人の有無、収入を伴う仕事の有無、暮らし向き、教育、最も長期間持っている慢性疾患、疾患発症後の期間、調査時点を説明変数とした線形混合モデルにより推定周辺平均を算出した。

CDSMP を受講した関節リウマチ(RA)患者を対象とした生理学的変化の追跡調査研究: CDSMP 受講予定であり、研究協力の得られたRAの患者8名を対象とした。対象は疾患活動性が低く、プレドニン内服用量5mg以下で、ホルモ

の影響を考慮し、閉経している 55 歳から 65 歳までの人を対象とした。先行研究の知見に基づき、自律神経・内分泌・免疫系および RA の疾患活動性指標を測定項目とした。CDSMP を受講し加えてワークショップ進行の認定資格を取得している慢性疾患患者を対象とした効果発現メカニズムに関するインタビュー調査研究：CDSMP を受講し、ワークショップ進行の認定資格をとり活動中の慢性疾患患者 14 名を対象とした。「CDSMP の効果」に関する半構成的インタビューガイドに基づき、フォーカスグループインタビューを実施し、IC レコーダーにて録音した。インタビュー内容を逐語録として記述し、テキストマイニング分析準備である形態素への分かち書きおよび類義語辞書の整理等を経て、単語頻出分析法（名詞）を用い、CDSMP の効果を尋ねるインタビューの中で頻出する演習項目を探索した。さらに、効果の示された文章について、文章単位でワークショップ演習ごとに分類した。次に上位に挙がった演習に関する効果内容を抽出し、意味ある一文をデータとしコード化した。類似している効果内容と判断したコードを集めカテゴリー化し、さらに、カテゴリー化された効果がどのように発現しているのかを検討するため、その演習の具体的な中身や方法と照らし合わせながら効果発現のメカニズムについて検討した。

## C. 研究結果

### 1) 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業事務局機能の実施

「免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業」事務局業務として所管課と研究担当者の間の連絡調整機能を果たし、平成 25 年度末の評価研究報告会を移植医療研究分野（宍戸分担研究者担当）は、平成 26 年 1 月 21 日に、免疫アレルギー研究分野は、平成 26 年 1 月 28、29 日に開催した。評価報告会用抄録の作成を各研究班主任研究者に依頼し、評価報告会における討議の資料とするとともに、各研究班同士の情報交換、研究連携に役立てた。さらに平成 24 年度研究報告書の刊行、平成 24 年度終了課題についての一般国民向けカラーパンフレットの作成を行った。

**2) 免疫アレルギー疾患関連情報発信機能の実施**：本研究事業の平成 24 年度報告概要をリウ

マチ・アレルギー情報センター（<http://www.allergy.go.jp>）に掲載した。例年のように、スギ花粉症等季節性の高い疾患に対しての医療従事者向けの期限付き相談対応窓口を開設した。時宜に応じた迅速な情報発信としては、1 昨年度設置した東日本大震災による被災者、被災地医療機関からの質問に対しての相談窓口を年度途中まで継続実施したが、その役割を果たしたと判断し、終了閉鎖した。また、同様 1 昨年度後半に開設した「茶のしずく石鹸」によるアレルギー被害関連の情報サイトを日本アレルギー学会特別委員会との連携の下、継続して情報提供を行ったが、日本アレルギー学会 HP での開設まで継続運営とするとの約束の下、本年度内に学会 HP に順次移行が始まった。厚生省免疫アレルギー疾患予防・治療研究推進事業として日本予防医学協会主催で、東京で開催したリウマチ・アレルギーシンポジウム（平成 26 年 2 月 1、2 日）に際してプログラム作成、講師選定等につき関与した。

### 3) アレルギー疾患自己管理マニュアルの作成及び患者主導の CDSMP の効果の検証

(1) 今期は、昨年度改訂された各種セルフケアナビの普及に努め、これら作成した自己管理マニュアルの普及状況の調査と効果的な使用法を検討し、患者からの意見を参考に必要に応じての改訂を計画するとともに 2012 年度に改訂された多くのアレルギー関連ガイドライン及び 2013 年 11 月に改訂刊行されたアレルギー疾患総合ガイドライン 2013 を踏まえて、各自己管理マニュアルの次年度改訂に向けての準備を行った。また、食物アレルギーに関しては、海外からの要請もあり、昨年度から継続しているモンゴル語翻訳版に加えて、英語版の作成も計画準備中である。自己管理マニュアルの効果的な活用方法の検討：昨年度改訂された各種セルフケアナビの普及に努め、これら作成した自己管理マニュアルの普及状況の調査と効果的な使用法を検討し、患者及び患者団体からの意見を求めた。(2) CDSMP の効果の検討としては、CDSMP 全受講者を対象とした質問紙による受講効果の追跡調査研究：CDSMP の効果発現メカニズムの要である健康問題に対処する自己効力感で有意な改善がみられた。CDSMP を受講した関節リウマチ（RA）患者を対象とした生理

学的変化の追跡調査研究：今回対象となったRA患者の8名中6名から得られたDAS28、およびVASは全ての患者で受講前より下がっていた。全ての患者において唾液中のコルチゾル量は受講によって正常範囲になり、午前中の分泌量が午後より多く、CAR(Cortisol awakening response)の反応がみられるようになっていた。また、IgAに関しては正常範囲もしくは正常より少ないという結果であった。自律神経活性指標は交感神経活性が受講前より受講後が下がっていた。CDSMPを受講し加えてワークショップ進行の認定資格を取得している慢性疾患患者を対象とした効果発現メカニズムに関するインタビュー調査研究：CDSMPの演習の中で最も受講者が効果を感じているのは、「アクションプラン」「医療者とやっていくこと」「問題解決法」である。

#### D. 考察

平成17年10月に厚生科学審議会疾病対策部会よりリウマチ・アレルギー対策委員会報告書が発出され5年後の平成22年に第2期報告書が発出され、我が国のリウマチ・アレルギー医療に関しての危急的、長期的方向性が示された。それを受けて、本研究事業においては、報告書の内容を実現すべく新規研究課題には、その方向性を反映した課題設定がなされたことは、時宜に適したものとして評価される。また毎年年度末には、2日間にわたり、アレルギー部門、リウマチ部門各1日研究評価報告会を開催してきたが、本来の目的である研究評価とともに各研究実施者の意見交換、情報交換の場として多くの研究者に参加を呼び掛けてきたが、初期の報告会では、2日間とも研究者及び研究協力者等の多くの参加が見られていたが、徐々に出席者数が漸減し、また評価委員の方々もご多忙の中、両日の全研究班の報告への出席が困難となってきており、今後年度末の評価報告会のあり方を再検討する必要があると思われる。報告書において強調された「アレルギー疾患は自己管理する疾患」としての位置づけの下、国と地方自治体の役割分担が明確にされたが、国の役割としての自己管理を支援するツールの提供という視点から、本研究班では、「患者さん向けの自己管理マニュアル」の作成と普及、さらに

自己管理をサポートするための効果的・効率的な日本型のセルフマネジメントプログラムの日本における改善につなげることを目的として、スタンフォード大で開発されたCDSMPスキル及び向上を目的とする非専門家主導の患者学習教育成長プログラムであるCDSMPを実施してきた。

また、当研究班で運営管理しているリウマチ・アレルギー情報センター(<http://www.allergy.go.jp>)は、当初の目的として医師をはじめとする医療関係者、患者、一般国民、リウマチ・アレルギー研究者に対しての全方位の情報提供を目指してきた。その中で、平成23年度には、3月に発生した東日本大震災関連の相談窓口に加えて、化粧品含有加水分解小麦の経皮感作による小麦アレルギーの大量発生に関連しての各種情報提供サイトの立ち上げ等、まさに時宜にかなったタイムリーな情報提供ができたことは特筆すべき成果であった。平成24年度にも両者に関する情報提供は継続実施してきた。平成24年度に日本アレルギー学会において化粧品含有加水分解小麦の経皮感作による小麦アレルギーに関しての特別委員会が立ち上げられたため、各種情報は、平成25年度から学会HPで一本化すべく、徐々に各種情報を移行して本情報センターからの発信は、徐々に縮小してきたが、当初に本情報センターが情報源として果たした役割は非常に大きなものがあったと思われる。

前期において作成された「患者さん向け自己管理マニュアル(セルフケアナビ)」は、医療者側からの視点のみでの作成ではなく、患者さんの側の視点を重視するために、研究協力者として患者会関係者の参加を依頼し、積極的な関わりをお願いした。その結果、これまでのいわゆるQ&A集とはかなり趣の異なった患者さん側の視点に立った使いやすい自己管理マニュアルができたと思われる。今期においては、その普及に努めるとともに各種ガイドラインの改訂に伴い自己管理マニュアルの一部改訂も行われた。これまでも全国地方自治体や各種患者団体、講演会事務局等からの引き合わせが多く、需要が供給量を大きく上回っている。現在、ホームページ上への掲載からのダウンロードによる使用を奨めているが、カラー印刷の問題や

見開き記載の問題等があり、冊子としての需要が多く、さらに予算面での制限があるため、希望により、実費での販売を行っている。また、患者会からの情報で、セルフケアナビに関心を持つ海外の患者団体もあり、平成 24 年度からは、モンゴル語への翻訳版の作成に着手し、現在、back translation まで進行中である。

CDSMP の効果の検討としては、CDSMP 全受講者を対象とした質問紙による受講効果の追跡調査研究：CDSMP を受講前後で、健康問題に対処する自己効力感、症状への認知的対処法の実行度、服薬アドヒアランス、健康状態の自己評価が改善し、健康状態についての悩みが軽減することが示唆された。CDSMP を受講した関節リウマチ (RA) 患者を対象とした生理学的変化の追跡調査研究：疾患活動性の低いリウマチ疾患をもつ患者に対する CDSMP の受講は自律神経系、内分泌系、免疫系を改善するメカニズムがあることおよび疾患活動性の悪化を防ぐことが示唆された。CDSMP を受講し加えてワークショップ進行の認定資格を取得している慢性疾患患者を対象とした効果発現メカニズムに関するインタビュー調査研究：CDSMP の受講による自己効力感向上のメカニズムの一部が具体的に示された。また、CDSMP で学んだことを、実際の生活に活かすことが出来るようになるためのプロセスが示唆された。

## E. 結論

本研究班では、免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業の効果的な遂行のための企画・評価・情報発信に加えて、自己管理支援のためのツールとしての患者向け自己管理マニュアルの作成、さらに自己管理に対しての患者自身のモチベーション向上のための CDSMP の我が国への導入を図り、その効果の検証を行ってきた。事務局機能に関しては、本事業における研究が滞りなく進行し、例年のごとく報告書、カラーパンフレット刊行等、初期の計画はほぼ予定通りに達成できた。しかしながら、年度末の評価報告会への主任研究者以外の出席者数の漸減、また評価委員の方々も多忙なため、全日程に出席が困難であるということなど、開催様式の再検討とともに評価委員の選定時期の早期化など本研究事業発足から 17 年経過した時点で再

検討が必要ではないかと思われる。免疫アレルギー疾患関連情報発信機能については、本年度は、昨年に起きた重要な社会的事象に対する対応を継続し、おおむね時宜に対応した情報発信はできたと思われるが、改訂が定期的に行われているアレルギー疾患関連ガイドラインについては、適宜ホームページの改訂が成されたが、リウマチ疾患ガイドラインについては、原本の改訂を含めて、今後の対応が必要である。アレルギー疾患自己管理マニュアルの作成とその効果の検証については、セルフケアナビはこれまで 5 冊 (乳幼児喘息、小児喘息、成人喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー) が刊行され、またガイドラインの改訂に伴い、セルフケアナビの改訂も逐次実施してきた。また、昨年度からは、モンゴル語翻訳版の作成が開始され、現在完成に向けての過程にあるが、海外での使用の効果が期待される。日本型のセルフマネジメントプログラムの開発と効果の検証については、我が国初の試みでもあり、現在進行中であり、今後の推進が必要である。特に本研究事業対象疾患についてのプログラム実施と効果の検証が必要である。

F. 健康危険情報 なし

## G. 研究発表

### 1. 学会発表

秋山一男

「実地臨床における喘息予防・管理ガイドライン 2012 の応用」

Astellas & AstraZeneca TV Symposium  
2013.05.16. 厚木

秋山一男

「政策医療概説 (免疫異常、アレルギー疾患)」  
東京医療保健大学大学院看護学研究科政策医療特論 2013.05.27. 東京

秋山一男

「難治性喘息の病態・治療・管理」  
第 25 回アレルギーと免疫を学ぶ会  
2013.06.21. 函館

秋山一男

「ガイドラインに則った成人喘息治療～SMART療法の有用性～」  
Symbicort Symposium 2013  
2013.09.13. 飯塚

小野美穂, 安酸史子, 北川明, 山住康恵, 米倉佑貴, 山崎喜比古, 湯川慶子, 上野治香, 石田智恵美, 生駒千恵, 江上千代美, 松浦江美, 松井聡子, 武田飛呂城, 千脇美穂子, 慢性疾患患者の自己管理支援を考える～慢性疾患セルフマネジメントプログラムとは?～, 第33回日本看護科学学会学術集会交流集会(2013年12月, 大阪)

北川明, 小野美穂, 山住康恵, 江上千代美, 松浦江美, 生駒千恵, 山崎喜比古, 清水夏子, 米倉佑貴, 湯川慶子, 上野治香, 石田智恵美, 安酸史子: 慢性疾患セルフマネジメントプログラムの効果について 実施前後のデータ比較から 第33回日本看護科学学会学術集会示説(2013年12月, 大阪)

宍戸清一郎: 小児腎移植の現況と今後の課題。九州小児ネフロロジー研究会、熊本県阿蘇、2013.7

宍戸清一郎, 濱崎祐子, 河村毅, 酒井謙, 相川厚: 臓器横断的シンポジウム3; 小児臓器移植の課題と展望: 小児腎移植の現況と課題。第49回日本移植学会総会、京都、2013.9

宍戸清一郎, 相川厚, 大島伸一, 高橋公太, 服部元史, 長谷川昭, 吉村了勇: 小児腎移植臨床統計小委員会報告: 本邦における小児腎移植の現況と献腎移植登録。第35回日本小児腎不全学会、磐梯熱海温泉、福島、2013.10

Shishido S: SYM04 Strategies to optimize access to transplantation: ABO-incompatible kidney transplantation in children. The 16th Congress of International Pediatric Nephrology Association (IPNA), Shanghai, China, 2013.8.31

Shishido S, Hyodo Y, Nihei H, Hamasaki Y,

Muramatsu M, Kawamura T, Sakai K, Aikawa A: Comparison of pharmacokinetics of once- and twice-daily tacrolimus in pediatric kidney transplant recipients. American Transplant Congress 2013, Seattle WA, 2013.5

## 2. 論文発表

粒来崇博, 秋山一男

第1部 免疫・アレルギー疾患の分子標的用語  
5章 アレルギー関連化学伝達物質  
免疫・アレルギー疾患の分子標的と治療薬事典 pp136-151 (田中良哉 編) 羊土社 2013.4 東京

秋山一男, 谷口正実

目で見る真菌と真菌症(17) 診療科・基礎疾患から見た大切な真菌症  
12.「アレルギー科」  
化学療法の領域 2013; 29(4): 556-564

秋山一男

Editorial 気管支喘息診療の進歩  
日本内科学会雑誌 2013; 102(6): 1323-1326

秋山一男

監修  
アレルギー診療ゴールデンハンドブック  
南江堂 2013.06.30. 東京

秋山一男

作成委員  
職業性アレルギー性疾患診療ガイドライン  
協和企画 2013.07.05. 東京

秋山一男

第6章 カビによる被害 6.2 健康への被害  
カビのはなし ～ミクロな隣人のサイエンス～ pp75-85 (編集: 高鳥浩介, 久米田裕子) 朝倉書店 2013 東京

秋山一男

作成委員  
アレルギー総合ガイドライン 2013

協和企画 2013.11.28. 東京

秋山一男

アレルギー性疾患 4. 対応・治療、5. アレルギー性疾患の増加について

改訂第8版内科学書 (総編集 小川聡)  
pp260-263 中山書店 2013 東京

秋山一男

今月の特集2 「I型アレルギーを究める」  
アレルギー特異的IgE検査の臨床的信頼性  
臨床検査 2014; 58(2): 246-251

北川明, 山住康恵, 安酸史子, 小野美穂, 江上千代美, 松浦江美, 山崎喜比古, 米倉佑貴, 朴敏廷, 上野治香: 慢性疾患患者における不安・抑うつ構造の分析, 防衛医大誌 2014; 39(1): 32-39

宍戸清一郎: 本邦における小児腎移植の現状と課題. 今日の移植 2010; 26(4): 361-368

宍戸清一郎: 小児臓器移植の最前線. 医学の歩み 2013; 244(10): 919-923

Shishido S, Satoh H, Muraatsu M, Hamasaki Y, Ishikura K, Hataya H, Honda M, Asanuma H, Aikawa A: Combination of pulse methylprednisolone infusions with cyclosporine -based immunosuppression is safe and effective to treat recurrent focal segmental glomerulosclerosis after pediatric kidney transplantation. Clin Transplant 2013; 27(2): E143-150

Ohshiro Y, Nakagawa K, Hoshinaga K, Aikawa A, Shishido S, Yoshida K, Asano T, Murai M, and Hasegawa A: A Japanese multicenter study of high-dose mizoribin combined with cyclosporine, basiliximab, and corticosteroid in renal transplantation (the 4th report). Transplant Proc 2013; 45: 1476-1480

## H. 知的所有権取得状況

1. 特許取得、2. 実用新案登録、3. その他 なし